

ふるさとふちゅう

再発見

【第67回】府中が農村だったころ(27) ～江戸時代の農作物

前回紹介した「国郡志下しらべ帳」では、江戸時代の府中村の農作物が掲載されており、五穀として米・麦・大豆・小豆・粟、蔬菜として松茸・蕨・(土)筆・山ノ芋が挙げられています。五穀は中心的な作物ですが、米や麦以外は時代や地域によって若干違います。府中村では粟が挙げられており、一定の栽培量があったのでしょう。蔬菜として挙げられている松茸・山芋・蕨・土筆も現在は姿をあまり見かけませんが史料にあるので当時は普通に食べられていたのでしょうか。

「国郡志下しらべ帳」では府中村の「農餘浮儲」(農作業が無いときの賃仕事)として「男は蓑細工、コモ・縄、女は木綿織のべ、耕作の隙に仕候」と書かれています。副業です。コモ作りや縄をない自家用だけでなく商品として販売もしていたようです。自給自足を原則とされた江戸時代でも「国郡志下しらべ帳」が提出された江戸時代後半には村にも商品経済が浸透し、賃稼ぎが行われていたことが分かります。

実際、「物産」として木綿・

蕎麦・大豆・豌豆・ウツマメ・琉球芋・アライモ・大根・多葉粉・胡麻・牛蒡・茄子・ホヲフラ・瓜・安養寺タデが記されています。これらは自家消費もあったでしょうが販売目的の栽培もされたものです。木綿・胡麻・多葉粉は明らかに売ってお金にする商品作物でした。大根や茄子・牛蒡などの野菜は広島城下へ売りに行ったのでしょう。府中町はそれができる距離です。『芸藩通志』で府中村が他村に比べて馬の数が極端に多いのは、農耕用よりもこういった物産の運搬に使役したことが考えられます。



現在も米作りが行われている山田地区

府中町文化財保護審議会

委員 菅 信博

魅力発信! まち記者レポート WAC_CAFEの自習室

まち記者 郷原 月華 さん

茂陰のWACTORY HLDGS (新和金属㈱)にある「WAC_CAFE」が自習室として利用できるようになりました。代表の新谷社長にお話を伺うと、「コミュニティスペースとして地域の方々の魅力発信の場や共に創る『共創』の場になってほしい」との思いから自社の一部をカフェとして開放されたのだそうです。地域の方から自習で使いたいという声があり、落ち着いて勉強したい人が気軽に来られる場所にしようと自習室を始められました。対象者は高校生以上で、毎週火曜・木曜の午後5時～9時の間、ドリンク1杯を注文することで利用できます。

この自習室には広島大学の学生スタッフが常駐していて、勉強や進路について相談に乗ってくれます。広島大学3年生の樋口さんは、国際協力サークル「スマイル プロダクション」でインドの貧困状態にある子どもを支援する活動を行っています。「レモネードスタンド」(売上の一部を小児がん闘病者に寄付する活動)に出店したことがきっかけで新谷社長と交流が始まり、この自習室に参加したそうです。大学生が企業と共創し、高校生ともつながる場になっています。

自習室は穏やかな雰囲気、利用者は集中して勉強に取り組んでいました。



自習室の様子



大学生スタッフが相談に乗ってくれます